

1、『矩を踰へずは、三毒の超越か』

70（古稀）になりまして、頭の中に浮かんだのは、孔子の論語の「70にして心の欲する所に従えども、矩を踰へず」の言葉でした。「矩を踰へず」とは、『思いのままに振る舞っても、度を過ぎさないようになった』とのこと。私自身思いのままにふるまったら、どうなるかわからない。具体的にはどういうことなのか。すると、仏教用語の「三毒」という言葉が、今度は浮かんできました。

三毒とは、ご存知のように

『貪欲（とんよく）＝自己の好む対象に向かってむさぼり求める心をおこすこと。』

『瞋恚（しんに）＝憎しみ怒り、心が安らかでないこと。いかり、腹立ち』

『愚痴（ぐち）＝真実の道理に無知な事。まことのすじみちが分からないこと』です。

私たちの日常は、三毒が抑えられず、自分に、妻に、友に、ときには全く見知らぬ人に、欲望、怒り、羨望・愚痴等の感情をぶつけることがあります。そして、自分自身、悩み、苦しみます。「矩を踰へない」とは、仏の教えの、「三毒の煩惱の超えることなのか」と、思いました。

2、『親鸞聖人の三毒』

親鸞聖人は、ご消息（お手紙）の中で、三毒について

「そもそもみなさんは、かつては阿弥陀仏の本願も知らず、その名号を称えることもありませんでしたが、釈尊と阿弥陀仏の巧みな手だてに導かれて、今は阿弥陀仏の本願を聞き始めるようになられたのです。以前は無明の酒に酔って、貪欲、瞋恚、愚痴の三毒ばかり好んでおられました。阿弥陀仏の本願を聞きはじめてから、無明の酔いも次第に醒め、少しづつ三毒を好まないようになり、阿弥陀仏の薬を常に好むようになっておられるのです。」

聖人のお手紙は、まさに今の私を指し示していました。この年になり、寺に常住している身となり、「少しは阿弥陀仏の薬(本願)を好むようになっている」のです。が、私の日常生活は、薬(本願)が、三毒の毒消しにはなっていません。恥ずかしいかぎりです。

3、『少欲知足は、三毒を越えるか』

「大経」には、『少欲知足にして染(せん)・恚(い)・痴(ち)なし』(欲が少なく、足りていることを知って、貪り、怒り、愚かさはなれる)とあります。「三毒を越える」根本には、この「少欲知足」と聖人が申されました「阿弥陀仏からの薬(本願=摂取不捨)をいただいている」ことがあると、受け止めました。

ここ1年ほど文通している「老子」を勉強している方が、大経の「少欲知足」の言葉から、『抑制なく限りない「欲望」をもつ人は、自然との共生に畏敬の念を持たず、また、自然に対し恐れを抱くこともなく、唯々無礼な所為のみ繰り返す。それ故「傲慢」な価値観を持つ

だけの人となる。自然を恐れ、謙虚、控えめに振る舞うことを旨とする人は、「欲望」少なく、「満足」を知る人なり、平穏な安らぎを得ることができる。』と書いてくれました。

この方の言われるように私たちは、生きるうえで「生きとし生けるもの」から、大きな恩恵（命）をいただいています。その事実を受け入れ、「欲少なくして、足ることを知る」の生活は「三毒を越え」、聖人ご消息の「仏のご恩を心に思い、それに報いるために心を込めて念仏し、世の中で安穩であるように、仏法が広まるようにと思われるのがよいと」につながると思いました。

心を込めて念仏し、その恩徳に感謝して、聴聞につとめたいと、思う日々であります。

合掌